

Heibonsha Library

西郷信綱 古典の影

学問の危機について

仁斎、宣長ら「古典」と現在との対話の中で、(批評と歴史)等の考察を通じて、
学問の根ざすべき(経験)という地平を主題化する。危機のありかを告げ、
(人間についての学)の広場へと招く開かれた思考。旧版に5篇を増補。

平凡社



平凡社ライブラリー 100

こてん かげ
古典の影

学問の危機について

発行日……………1995年6月15日 初版第1刷

著者……………西郷信綱

発行者……………下中弘

発行所……………株式会社平凡社

〒152 東京都目黒区碑文谷5-16-19

電話 東京(03)5721-1253[編集]

東京(03)5721-1234[営業]

振替 00180-0-29639

印刷・製本……………株式会社東京印書館

装幀……………中垣信夫

©Nobutsuna Saigo 1995 Printed in Japan

ISBN4-582-76100-3

NDC分類番号910.2

B6変型判(16.0cm) 総ページ318

落丁・乱丁本のお取り替えは小社読者サービス係まで
直接お送りください(送料,小社負担)。

Heibonsha Library

口典の影

平凡社

古典の影

学問の危機について

西郷信綱

平凡社

本書は、一九七九年六月、未来社より刊行された
『古典の影——批評と学問の切点』を増補し、
サブタイトルを変更したものです。

目次

古典の影……………9

学問のあり方についての反省……………27

文学史の非完結性……………66

批評と文学史——アカデミズムへの疑問……………94

《読む》という行為……………119

物に行く道——宣長のこと……………142

古典としての『吉野の鮎』……………159

詩人と歴史家と——風巻景次郎「西行と兼好」……………171

万葉集と歎異抄とをむすぶ——吉野秀雄追悼……………187

学問の散文……………194

断章……………200

人類学のこと……………200

正徹について……………209

古典の物化……………213

歿後の門人ということ……………218

縦糸と横糸……………222

宣長を読み直す……………228

散文について……………232

詩人の命……………235

草稿から版下まで……………241

国語教師……………

ヲサのはたらき……………

思考の労苦について……………

「わが古典」とは何か……………

複眼で読む……………

学界偶感……………

《解釈》についての覚え書き……………

平凡社ライブラリー版あとがき……………

初出一覧……………

解説——私はこの本をこう読んだ……………

306

304

302

274

266

260

255

251

244

242

大西廣……………

古典の影

伊藤仁斎「童子問」の一節にいう。「一にして方にゆく、これを博学といふ。方にして又方、これを多学といふ。博学は猶、根あるの樹、根よりして而して幹、而して枝、而して葉、而して花実、繁茂稠密、算へ数ふべからずと雖も、然れども一氣流注して、底らずといふ所なく、いよいよ長じて、いよいよやまざるがごとし」。これにたいし「多学」は布でつくった造花で、らんまんと咲きみだれ人の目をよろこばせはするが、しよせん死物にすぎず、成長するといふことがない。両者は一にすべきでなく、「駁雑の学を以て博学とするは誤れり」と。(訓みは古典文学大系『近世思想家文集』による。)

古典が偉大なのは、たんにそこでいわれていることじたいによつてではなく、そこでいわれようとしてゐること、すなわちそれが私たちに投げかける志向性の影によつてである。文学史とか思想史とかよばれる学問が、おおむね無味乾燥で、現代とひびきあうことがまれな

のは、古典にいつてあることをたんなる歴史的、事実として対象化し、それが私たちに投げかけてくるこの影をうけとめようとしなからである。右の仁齋のことばにしても、一古学派儒者の言として、当時の儒学史の系譜や枠組のなかでたんに事実に読むなら、せいぜい朱子学批判の一節にすぎず、おそらく引用にも価しないだろう。しかし、このことばで仁齋が何をいわんとしてゐるか、つまりこのことばの背後に、目に見えぬ、仁齋のいかなる種類、いかなる量の経験がよこたわつており、それがここにいかに表現されているかという点を読みとろうとするならば、それは私たちの精神を強く照射することばとして、とみにそのこだまをひろげてくる。たとえば次のような一連のこだまを、右の仁齋のことばは私の心によび起す。

今日の論壇で活躍している八宗兼学を自任する士の多くは、「一にして方にゆく」ところの「博学」の士ではなく、実は「万にして又万」なる「多学」の徒に外ならないのではあるまいか。あるいは、ジャーナリズムという世界は、右にいわゆる「多学」という名のさまざまな造花が咲き競い、ニセガネのひびきで衆人をあざむく市場のごときものではないか。いや、論壇とかジャーナリズムとかにかぎらず、私たちじしんの今日の学問にしても、しつかりと大地に根を張っているのではなく、したがって、根よりして幹、そして枝、そして葉、そし

て花実へと茂り成長してゆく見こみを大してもっていない「駁雑の学」という泥沼におちこんでいるのではなからうか。今の日本において、学問的成熟がひどく困難であり、私たちの学問が結局、若いときにやった仕事の因襲的なくりかえし、その解体または水ましといった尻つぼみの状態に終り、「一」にしてついに「一」にすぎぬような形になりがちなもの、「一」にして万」に至るその「一」なるものの根源的定立に欠ける点があるからではなからうか。少くとも現代の私たちの学問はおしなべて、どこかで決定的に故障しており、しかもそのことがほとんど反省されずにきているため、この故障はいつそう無気味なぐあいに深まり、かつひろがって行こうとしているのではあるまいか、と。

右の仁齋の一文を読むと、私は否応なくこのようなことを考えさせられる。これは仁齋からの逸脱でもなければ、いわゆる深読みでもないと思う。その志向性において読むとき、右の一文の行間の沈黙から、まさにこのような意味が発してくるのである。いま立入ることはしないけれど、行間を読むという古来の読書法には、言語表現の本質からしても首肯される点があるはずで、とにかく、この行間の沈黙から発してくるもの、これが私たちに投げかけられた古典の影であり、古典がつねに読み直され、そこに人があらたな意味を見出すのも、この影においてである。だから、そこに表現されている観念の姿そのものが問題であるだけ

でなく、それが私たちに放射してくる意味、それによって私たちをあらたな探究に向つて開くところの意味、すなわち古典のヴェクトルとでもいふべきものが同時に問題なのである。「童子問」が日本における学問論のもつとも重要な、だがかくされた古典であると私に思えるのも、この点にかかつている。以上は一節をとり出して云々したにすぎないけれども、同じような志向がこの本の全体をつらぬいていることは、次に引用する若干の章句によつても明らかである。

人の外に道無く、道の外に人無し。……故に道を知る者は、必ずこれを近きに求む。その道を以て高しとし、遠しとし、企て及ぶべからずとする者は、皆道の本然にあらず、みづから惑ふの致す所なり。

卑ひくきときは則ちおのづから実なり。高きときは則ち必ず虚なり。故に学問は卑近を厭ふこと無し。卑近ゆるかを忽ゆるかにする者は、道を識る者にあらず。道はそれ大地の如きか。天下、地より卑きはなし。然ども人の踏む所、地にあらずといふことなし。地を離れて能く立つことなし。況や華嶽を載せて重しとせず、河海を振おめて洩おらさず、万物載するときは、

則ち豈その卑きに居るを以て之を賤かろんずべけんや。

書を読んで識見なきは、猶読まざるがごとし。いやしくも識見を得んと要せば、まさにその帰宿する所を尋ぬべし。徒に涉獵すること勿れ。すべからく外に在る者の家に帰ることを求むるが如くすべし。迷子の道路を行くが如くすべからず。

推敲に一生をかけたというだけあって、緊張しているとともに堅牢で、おしゃべりのない、また一点の私心を感じさせぬ、それでいてゆたかな意味と影を放つ文章である。比喩にたよりにすぎているというかもしれないが、それはそうではなく、経験と学問との比喩的にかいたとれない相関関係の深所に参入しているわけで、私はむしろその比喩の秘めているアンビギュイテイにひかれる。仁斎が心を労してたたかっている地点を、逆に私たちは、ある種の論理的自明性や言語的なおしゃべりでもってやりすごしてはいないか。いかにも彼は古義学派と称される学派の創始者であり、『童子問』はこういう立場から、窮理を事とし虚静に耽る宋儒理性の学の越権に対抗して、人心に根ざし風俗に徹した人倫日常の学こそ論孟の古義にかなうゆえんであることを説いたもので、以上に引用したところもすべてこうした文脈のな

かでいわれたものである。この時代的文脈は、『童子問』の本質を理解するのに、いうまでもなく不可欠である。だが、当の相手であった朱子学（宋学）が滅び、また仁斎の信じていた孔孟の学そのものがすたれてしまっても、『童子問』が、江戸の思想史とか儒学史とかを組みたてるための歴史的素材にとどまらず、なお今日、私たちの精神を照らす力をもった学問論としてよみがえって来ることができるのはなぜであるか。それは、時間にうちかつ一つの新しい総合、真理と呼ぶほかないような一つの総合が、この著作においてなしとげられているからで、そしてそれは、下学上達という弁証法のたまものであったと思う。仁斎いう、「下学は猶、平地上に在て行くがごとし。循循としてやまざるときは、則ち能く万里の遠きに到る。……向上の一路を求むる者は、猶平地を去て、空中に上騰せんと欲するがごとし。墜て傷損せざる者は、未だこれ有らず」と。この万里の遠きに到った姿を、私は一つの新しい総合、または真理と呼ぶ。

世阿弥のことばは、能芸を論じて能芸をこえ、芭蕉のことばは俳諧を論じて俳諧をこえてゐる。仁斎のことばもまた、孔孟の学を論じてそれをこえるものといつてよからう。これは彼の学問が、みずからいうとおり、大地に根をおろし、根より幹、そして枝、そして花実へと茂り成長していつているしるしである。だがさきにいつたように、そこに結実している観

念の形姿の見事さを眺めるだけでは充分でない。大事なのは、そのいわゆる下学上達をさらに徹底化し、いつそう下学にして上達しようとするならば、仁齋の思想体系は外ならぬ仁齋じしんの志向性によって内部から爆破され、孔孟の学という枠組もどこやらに吹きとんでしまふであろうということ、そのような影を『童子問』じしんが私たちに投げかけているという点である。いいかえれば、仁齋が孔孟の学にとどまらざるをえなかつたのは、儒教という時代通念の枠にしばられ、その下学上達を学問の方法として徹底化することができず、方法的、自覚的となるべきものを倫理的、心得の次元に終らせていることに関係する。

それにしても仁齋の志向が儒教の枠をこえ、未来を先取していることは疑えない。「下学而上達」という論語の有名なことばは、「下学人事、上知天命」と古くから注されているが、彼は学問における経験と認識の問題としてこの古言にあらたな意味付与をおこなおうとしていると見ていい。このように彼が先取しているものを過去から現代に拉し来らねばならない。

彼の文章には、「大地」とか「根」とか「花実」とかいう語がよく使われている。で、うっかり読むと、いわゆる土着主義を説いているかのような印象を受ける。しかし、彼はけっして「一」にしてついに「一」に終る土着を説いているのではなく、「一」にして方にゆく、そ